



OMAG!



OFWGKT



asaakim



タイラー、ザ・クリエイターの最新アルバム**Goblin**のデラックス・エディションのジャケットのアートワークが公開された。ここに映し出されたタイラーの両の目の真っ黒な眼球からは、すぐさま、先行カット"Yonkers"のミュージック・ビデオの一場面が思い起こされるだろう。肉づきのいいゴキブリを口に含み、ゲロやツバを吐き出したあと、彼の目は映画に出てくるような、本性を剥き出しにしたヴァンパイアのように、この目に一変してしまう。

「ドラキュラは大好き。だから、ドラキュラの視点で曲を作ってみた。といっても、ユーモラスなのを。例えば、俺がそこで言ってるのは、ヴァンパイア・スレイヤーのバフィがいつも俺をつけまわしたり、ニンニクやなんかをプレゼントに贈ってきたり、とか。俺は自分のラップが好きだ。でも、なかにはどうしても満足できないものもある、もっとましなのができたんじゃないか、って。でも、この曲の、自分のフロウを聴くたびに、俺ってすごいなって思ってるんだ」\*

この曲とは、**Goblin**の収録曲"Transylvania"のこと。制作中のツイートからも確かな手ごたえがうかがわれるが、4月2日にL Aのポモナのグラスハウスで行なわれたライブで披露されたのが、この曲だったのではないのか、とも言われている。（**Goblin**のトラック・リストは以下の通り）。

01 Goblin

02 [Yonkers](#)

03 Radicals

04 She (featuring Frank Ocean)

05 Transylvania (produced by Left Brain)

06 Nightmare

07 [Tron Cat](#)

08 Her

09 [Sandwiches](#) (featuring Hodgy Beats)

10 [Fish](#)

11 Analog (featuring Hodgy Beats)

12 Bitch Suck Dick (featuring Jasper Dolphin & Taco)

13 Window (featuring Domo Genesis, Frank Ocean, Hodgy Beats & Mike G)

14 [AU79](#)

15 Golden

(Bonus tracks)

16 Burger (featuring Hodgy Beats)

17 Untitled 63

18 Steak Sauce

タイラーが契約したレーベル、XLレコーディングスは、3月に、このGoblinのプロモ用に[ウェブ](#)  
[サイト](#)を立ち上げた。そのサイトを開くと、ほんの一部ではあるけれど、曲が聞こえてくる。7曲  
目の"[Tron Cat](#)"だ。ただし、今回がこの曲のプレミア公開ではない。タイラーを中心とするクルー、  
オッド・フューチャーの一員であるジャスパー・ドルフィンのスケートボーディング（と彼にちょっ  
かいを出すタイラー）を収めた[ビデオ映像](#)のサウンドトラックの一曲目として使われていた。その  
中で、ほんの一瞬だけ聴こえてくるのが、タイラーが、エース（、ザ・クリエイター）名義でレコ  
ーディングした、その名も"[Dracula](#)"。初出は、[The Odd Future Tape](#) (Mixtape、2008.11.27)。ここ  
には、"My [castle](#) got dungeons, my dungeons got [dungeons](#), open up them legs let me see what for  
[luncheons](#)"なるラインもあることから、ドラキュラ目線の新曲



"Transylvania"につながっていったとも想像できる。***In Search Of..***の頃のN.E.R.Dのトラックを彷彿  
とさせる、この"Dracula"の正式タイトルは"Dracula's Sextape"といい、本来はボーナス・トラックと  
して収録されていたものだったとも言われている。ドラキュラによる[POV](#)だ。

Sextapeを撮る目的で使われる拷問部屋としてのdungeon、そこで繰り広げられる凌辱の臭いは、  
タイラーを大々的にフィーチャした、オッド・フューチャーのメンバーの一人、アール・スウェッ  
トシャツの[Couch](#)でも漂っている・・・（続く）

## 2. KTA

[She lick it up, Dracula, then spit it back, back at ya](#)

と、アール・スウェットシャートのアルバム [Earl](#) (Album,2010,3.31)に収録された "[Couch](#)"には出てくる。



この曲は、自称”賢くて頭の回転の早い”アールと、自称”相当いっちゃってる”タイラーとの共演という設定。彼らのクルー名は、オッド・フューチャー・ウルフ・ギャング・キル・ゼム・オール（O F W G K T A）。ウルフ・ギャングからは、[アニメに出てくる、いじめっ子キャラの名前](#)、あるいは（ドラキュラとの相互連想により？）狼男（Werewolf）、あるいは狼みたいに夜中に声をあげる連中、あたりが思い浮かぶが、構成員の多くがラッパーなのだから、そのままキル・ゼム・オール（Kill Them All(皆殺し)）をつなげてみると、「他のラッパーたちを撲滅してやる」とのメッセージも浮かびあがってくる。

少なくとも、この曲、あるいは、この曲のすぐ後に入っている、例えば”[Kill](#)”を途中まで聴く限り、それは間違いなさそうだ。ところが”Couch”もブリッジにさしかかる頃から、逸脱が始まる。

2ndヴァースで、タイラーは

I'm stealin' purses rapin' nurses I'm a [crooked surgeon](#)

...I'm [squirtin'](#) while I'm masturbatin' and [regurgitatin'](#)

[From eatin' Miley Cyrus salad pussy platter they were servin'](#)

[My only purpose is to jerk it](#) cause [it has a curve](#)

マイリー・サイラスのお手入れの具合は定かではないけれど、タイラーは、これまで、あまりヒップホップで表現されることのなかったやり方で、イカレきった自分の”強さ”を誇示している。

そして、アールのShe lick it up, Dracula, then spit it back, back at ya が出てくる。ただし、その後、この相手の女の子が、アールのクルマのトランクに押し込まれ、ヤクを与えられ、ビニールテープで口を塞がれていることがわかる。誘拐された彼女が拉致られた先にはタイラーが待ち構えていたのだ。

While I fill you up with semen from the Wolf Gang team and  
Flowin' like the creampie inside of your daughter

が、これだけでは済まない。タイラーは、このコの腕をノコで切り落とし、オークションにかけたり、グリル用に歯を抜いたり、残虐の限りを尽くす。彼がなぜそこまでするのかと言えば、他の全てのラッパーたちの震えをパーキンソン病患者のようにとまらなくするためだ (Shakin' like it's Parkinsons from the clitoris of Kelly Clarkson's dick)。その中には、アールさえ含まれる。タイラーは証拠隠滅のため、アールをナイフで刺し殺した上、火を放って現場を後にするのだった。まさに、キル・ゼム・アール！皆殺しだ！

それでも、アールは死なない。続く"Kill"では、「奴が俺を殺したと思うか。まあ、それでもいい。今にわかる」と始め、すかさずタイラーへ反撃に出る。"Couch"でナイフで刺されたことを受けて、Go ahead, stab a friend, tell him that I'm back, bitch等ともライムする。そして、フックでは、Just watch, I'mma kill 'em all / Just watch, I'mma kill 'em all / Just watch, I'mma kill 'em allと唱える。ところが、それまでの2ヴァースで、明かに（他の）ラッパーを標的にしていたのに、Just watch, I'mma kill 'em allのJust watch,に導き出されたかのように3rdヴァースでは、リスナーにビデオカメラを手渡す。

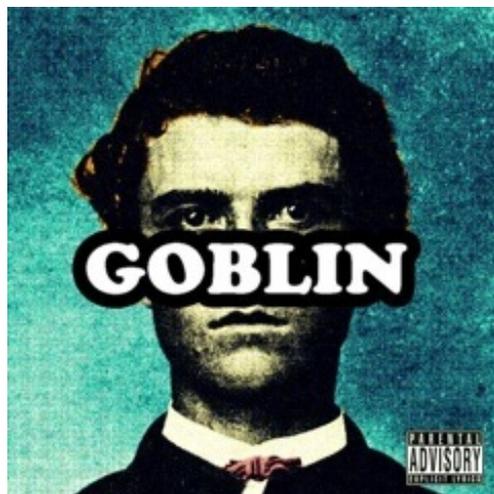
Now pan the cameras back to me and [Pamela's](#)  
Amateur threesome with [Hannah Montana's](#) manager  
And Miley feedin' me sandwiches for my stamina

そこに映し出されたのは、マイリー・サイラス（またも登場）から差し出されるスタミナ補給のサンドウィッチをほお張りながら、（マイリー・サイラス扮する）ハンナ・モンタナのマネージャー（＝ビリー・レイ・サイラス、聞こえないところで、つまり、サイラスで韻を踏んでいる？）と、パメラ・アンダーソンと3Pにいそしむ未成年アールの”ヤリすぎた”姿。もちろん、彼は"Couch"に出てくるタイラーの、さらにその上を行こうとしている。これはバトル・ライムのイキ過ぎた姿なのだ。

アールとタイラーは、同じクルーの仲間であっても（仲間だからこそ）、互いに相手をぶっ潰そうとしてみせる。マイクを握ったら最後、あとはとにかくK T A（キル・ゼム・アール）なのだ。アールが、ここまでタイラーに対抗意識をむき出しにしているのには他にも理由がある・・・（続く

## 5. Buffalo Bill

これまでに触れてきたように、タイラーとアールの書くリリースには”凄惨きわまりない”描写がつきものだ。そこから考えるなら、タイラーが**Goblin**のプロモーション用に立ち上げたウェブサイトのURLが<http://www.buffalo-bill.net/>なのは合点がゆく。このサイトを開くと、目からは**Goblin**のジャケットのアートワーク、耳からはアルバム収録曲"[Tron Cat](#)"が入ってくる。このジャケットに映し出されている人物こそ、バッファロー・ビル、その人なのだ。



ただ、（かつて、映画ではポール・ニューマンが演じたこともある）この伝説的な人物（本名ウィリアム・F・コディ）と、”凄惨きわまりない〜”とは、なかなか結び付けにくい組み合わせかもしれない。そこで、この間に、もう一人のバッファロー・ビルを挟んでみる。映画でも御馴染みのトマス・ハリスの小説『羊たちの沈黙』の、あのシリアル・キラー、ジェーム・ガム。彼の異名もまたバッファロー・ビルなのだ。

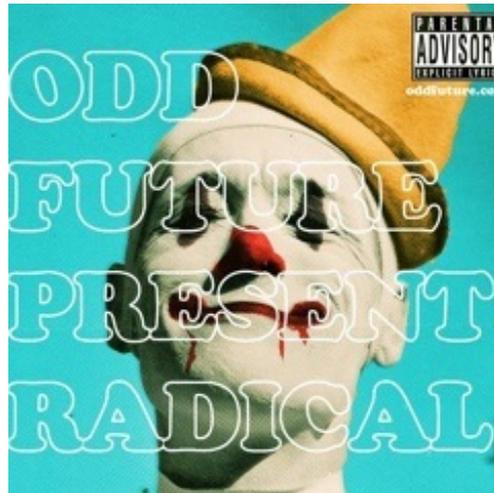


**Goblin**のジャケに映っているウィリアム・F・コディがなぜバッファロー・ビルと呼ばれるようになったかと言えば、彼が約4900頭ものアメリカバイソン（バッファロー）を仕留め（一説によると、絶滅の危機にまで追い込んだという）、売り物にするため、手下にその皮を剥がせたことからだと言われている。一方のガムのほうは、女性を誘拐、拉致、殺害したうえ、その皮膚を剥がし、それら

を縫いあわせたものを身につけ、女性になろうとしていた。小説では、この猟奇殺人の現場の検証にあたった捜査員が、バイソンを次々に殺した（ほとんどKTA=KILL THEM ALL!そして、皮を剥がせた）実在の人物コディとガム（の残虐な行為）をダブらせたつぶやきをもらったのをきっかけに、ガムがバッファロー・ビルと呼ばれるようになる。

ここからおのずと、タイラー・ザ・クリエイター=バッファロー・ビル=ジェイム・ガム説が浮上してくる。だからこそ、**Goblin**の通常盤のジャケットは、W・F・コディでありながら、デラックス盤では、これまで曲の中でしばしば、女性を誘拐、拉致、強姦、殺害、遺体損壊してきた（ヴァンパイア化した）タイラーということになるのだろう。

だが、これだけではない。バッファロー・ビル=ウィリアム・F・コディは、19世紀末に、ネイティブ・アメリカンまでも出演させた一座を率いて、禍々しさ100%?のショウ、ワイルド・ウエスト等を演目にして巡業していたショウマンでもあり、“偉大なるアメリカン・エンタイナー”としても後世に名を残している人物なのである（ロバート・アルトマン監督による映画『ビッグ・アメリカン』（ちなみに原題は[Buffalo Bill and the Indians, or Sitting Bull's History Lesson](#)という）は、バッファロー・ビルのこちらの側面に着目している）。



"O.F.Soldier, Buffalo Bill" (オッド・フューチャーの兵士はバッファロー・ビル) クルーの一人マイク・Gは"[Cool](#)" ([Odd Future present Radical](#) (Album,2010.5.7) 収録) でこうライムしている。が、まさに、[そのエンタイナーっぷりによって](#)、タイラーと彼の率いるオッド・フューチャーは、格段の注目を集めたのだ。果たして**Goblin**で、タイラーは、いかなるふり幅でバッファロー・ビルを体現しているのだろうか。もちろん、通常盤のジャケットにウィリアム・F・コディをポートレートを採用した時点で、エミネムの"[Buffalo Bill](#)" ([Relapse:Refill](#) (Album,2009.12.21) 収録) からは大きく飛躍していることだけは間違いなさそうだが・・・ (続)

## 6. (Inglorious) Bastard

"I'm the reincarnation of 98 Eminem"

"[Assmilk](#)"で、アールは自分を今のエミネムではなく、メジャー・デビュー以前のエミネムと重ね合わせてみせることで、リスナーが、自分（たち）を安易にエミネムと比較することに釘をさしているかのようだ。

アールは、この曲が収録されている [Bastard](#) (Album.2009.12.25) を聴いたリスナーが、一連のエグいデモニッシュな描写や、そんな中にポップ・アイコンたちを情け容赦なく巻き込んでゆくようなセンスが、エミネムと比較したい誘惑に駆られることを想定していたとも考えられる。ただし、それだけでは上っ面しかなぞっていないことが、**Bastard** を締め括る "[Inglorious](#)" を聴くとわかってくる。

この曲は、カウンセラーから「そろそろ時間です。君はいい子なのに、誤った方向に導かれて、最後に何か言いたいことは？」と促されて、こう始まる。

My father died the day i came out of my mother's hole and left a burden on my soul  
until i was old enough to understand that the fucking faggot didn't like me much

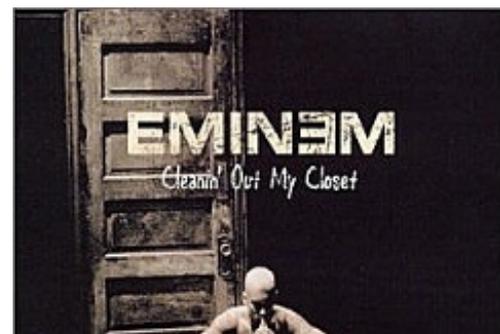
(オレのオヤジが死んだのは、オレがオフレコの穴の中から出てきた日、心にわだかかまりを抱えたまま大きくなってようやく理解できた、あのカマ野郎、オレのことなんて大嫌いだったんだ)

ここから、ポップス・ファンにもお馴染みの、2002年を代表するあの特大ヒット曲を思い出してしまうむきもあるだろう。

...I was a baby, maybe I was just a couple of months, my faggot father must have had his pantie's up in a bunch, cause he split, I wonder if he even kissed me goodbye, no I don't on second thought, I just fuckin' wished he would die,

(オレは赤ん坊だったってか生後数ヶ月だった、オレのオヤジのあのカマ野郎は、ビビったのさ。逃げたからな。お別れのキスくらいしてもらったか、いや、そんなはずない、オレはマジで死んでほしいと思った)

そう、これは、エミネムの "[Cleaning' Out My Closet](#)" の 2ndヴァースの一部だ。





母親のやり方を終始一貫批難してきた”母親ディス”で悪名高いエミネムだが、自身の存在を問う（確認する）場面となれば、自ずと父親の存在にも触れざるを得なくなくなる。"Cleaning' Out My Closet" から数年後に発表された "[Evil Deeds](#)"では、アプローチを変えている。

Father please forgive me for I know not what I do  
I just never had the chance to ever meet you  
Therefore I did not know that I would grow to be  
My mother's evil seeding do these evil deeds

（オヤジよ、お願いだオレを許してくれ、オレは自分が何をしてるのかわかってないんだ。  
一度もあんに会える機会がなかった。  
だから、わからなかったんだ、自分がどんな大人になるのか。  
オフクロ譲りの悪の種子が悪さをさせる）

もっとも、そこはエミネム。一瞬、父親に許しを乞うて、母親を悪者にしたあげているように見せかけ、両親ともに非難の対象にしていることがわかるリリックになっている。このあと..Momma why do they keep saying this I just don't understand, understand. And by the way, where's my dad? と続け、自分を棄てた父親の所在を確認している。30歳を過ぎたエミネムがこれなのだから、感じやすいハイティーンのタイラーなら、”父親の不在”が気になってたまらなくてもおかしくはない。だが、今あらためて振りかえってみれば、98年の時点で、エミネム自身は既に父親だった。しかも、[その時、既に書かれていた、自分は”子連れ”で、この子供の母親がダメ女だから、たった今殺してきた、という曲をそのままメジャー・デビュー・アルバムに収録し、その逸話をジャケットのアートワークとしても採用している。](#)”父親の不在”ではなく、間接的ではあるものの、”父親の存在”を表明して登場したラッパーだった。

これは、（自分の）”父親の不在”の問題には、稀に触れることはあっても、自分自身も既に父親なのに、父親である素振りも見せず、あくまでも自由奔放に生きる遊び人としてのペルソナを前面に押し出すかたちで、”父親の不在”を（やはり、間接的に）表面化してきた既存のラッパーたちの中にあっては、かなり奇異な存在にうつる。

父親の存在にしろ不在にしろ、間接的に表現してきたラッパーたちと比較するなら、タイラーはあまりに直接的だ。何度も出てきたように、自主制作による一枚目のアルバムを **Bastard** と名付けている。Bastardには、”クソ野郎”以前に、”私生児”、別の言い方をすれば”父なし子”という意味がある。



This is what the devil plays before he goes to sleep  
Some food for thought some food for death, go ahead and fucking eat  
My father's dead. Why? I don't know, we'll never fucking meet  
I cut my wrist and play piano cause I'm so depressed  
Somebody call the pastor, this bastard is so possessed  
This meeting just begun, nigga I'm Satan's son

(こういう曲を、悪魔は奏でて眠りにつく

思索の糧にもなれば、死の糧にもなる、曲は続き、その糧にありつく  
オヤジは逝ってしまった。原因は？知らない。一度も顔をあわせたことないし  
オレはリスト・カットしてピアノを弾く、ひどく落込んでるから  
誰か牧師を呼んでくれ、このBastardには悪魔がとり憑いている  
このカウンセリングは始まったばかりだ、俺はサタンの息子だ)

アルバムでは、カウンセラーの登場を受けて、いきなりこう始まるのだ。この"[Bastard](#)"の一番最初のヴァースに、"父親の不在"、それに由来する自殺願望、そして、アルバムを聴き進めるうちにタイラーの執着の対象であることがわかってくる、悪魔、悪魔払い、サタン、そして、[ピアノ](#)を洗いざらい盛り込んで、ハッキリと打ち出してさえいる。

そして、あらためて、アルバムのエンディング曲"[Inglorious](#)"を聴いてみることにする。 続)

## 7. Goblin

birthdays, christmas, my only fuckin' wishlist was CD's (and a father)

タイラーは"Inglorious"で、父親に会いたい一心だったことを素直に打ち明けている (and a fatherにはディストーションがかかってはいるものの・・・)。そして、自分が"落ち着きがない子供だったのは、実の父親に無視されていたから"、"統計では、父親のいない奴は成功しないとある"とも思い悩む。と同時に、"俺がうまくいきそうなこの雰囲気、まだわからないかな"と、父親がいなくても、ここまでまともにやってきた自分を見てほしい、認めてほしいと、父親に向かって訴える。そして、

(I know I'm not the only bastard in America so ima need some help on this next part, scream it with me  
niggas)

(アメリカでは**bastard**はオレー人だけじゃない、だから、オレと一緒に叫んでくれ)

と、自分と同じような境遇に育ってきたリスナーを味方につけ、

"オレを無視しやがって！おまえのことを無視しやがって！オレたちのことを無視しやがって！"

どこにいるのかわからない父親に向かって、何度でも叫ぶ！

**FUCK YOU !**

こうした（意外に、と言っては失礼かもしれないけれど）純粋な面が、特に、まだ家庭も子供も持っていないようなハイティーンを中心とするリスナーに大きな共感を抱かせたことは間違いないだろう。

そんな真摯な態度の中にも、母親が父親役も担っていることから、母親の仕事は、女なのに男役も演るレズみたいだ ('cuz she's playing both roles like her occupation was dyke) とか、父親が一度も会いに来てくれず、自分のことが全く眼中にない、見えないなんてスティーヴィー（・ワンダー）なんじゃないか (my father never seen me, the nigga probably Stevie) とか独特のユーモアも見せる。

ところが、この曲は意外な末路を辿ることになる。

now this counselor is tryin' to tell me that i'm emo

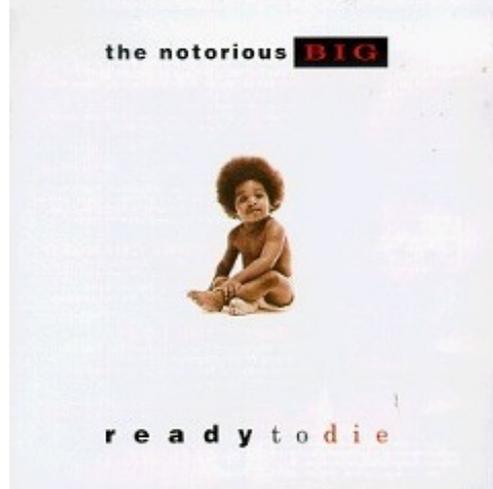
she don't give a fuck d-lo,

where's the trigger i'll let this bullet play hero

(さては、このカウンセラー、決めつける気だな、オレがエモだって

内心、オレのこと、どうでもいいと思ってやがる

どこが引き金だ？ 弾をぶっ放して、ヒーローを演じてやる)



[Ready To Die](#) (死ぬ覚悟) なのだろうか？

タイラーは自死の覚悟さえしているのだ。エモな自分も彼の真の姿なのではないのか？ もうこれ以上エモな自分をさらけ出したくないのか？ エモな自分は誰にも理解されないのか？ エモな自分におさらばしたいのか・・・？

その打開策の一つが["Yonkers"の3ヴァース目](#)に示されているのではないだろうか。

Still suicidal? I am

I'm Wolf, Tyler put this fuckin knife in my hand

I'm Wolf, Ace gon put that fuckin hole in my head

And I'm Wolf, that was me who shoved a cock in your bitch

Fuck the fame and all the hype G

I just wanna know if my father would ever like me

But I don't give a fuck cause he's probably just like me

A muthafuckin **GOBLIN**

(Fuck everything man) That's what my conscience said

Then it bunny-hopped off my shoulder now my conscience dead

Now the only guidance that I had is splattered on cement

Actions speak louder than words, lemme try this shit

DEAD

(自殺願望だって？オレが

オレはウルフだ、タイラーがこのナイフを俺に握らせる

オレはウルフだ、エースがオレの頭に風穴をあける気だ

ってかオレは狼だ、だからオレがおまえんとこの雌犬にイチモツをぶち込んでやった

名声も評判もクソ喰らえ

オレが知りたいのは、オヤジがオレを好きなのかってこと

まあ、どうでもいいさ、オヤジもオレみたいな人間だろうから

とんでもないゴブリンなのさ

(もうどうにでもなれ)それがオレの意識の言葉だった

そして、オレの肩からスポッと勢いよく飛び抜けてゆく、もうオレの意識は死んだ  
唯一オレを導いてきたものが、今はセメントにぶつかって血まみれだ  
行動は言葉より雄弁だ、そうさせてもらうよ  
死)

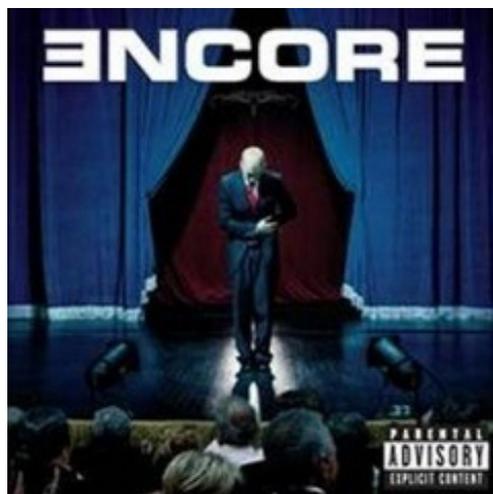
これで"[Yonkers](#)"のビデオで、なぜ、タイラーが鼻血を流し、目の色を一変させ、自らクビを擧げて死んでいったのか、もうおわかりだろう。タイラーは、自分の意識を、自ら殺めたのである。そこにあらわれ出てきたのが、



**GOBLIN**だというのだろう。

それにしても、タイラーのやり方（見せ方）はうまい。"Yonkers"のビデオでは、最初の2ヴァースだけしか聴かせず、しかも、突然の自害という、それだけでインパクトのある幕切れにしておいて、リスナーが、何とかしてその理由を探ろうと、この曲を何度も聴いて、それでもわからないと嘆いているうちに、iTunesで楽曲を正式にリリース、それをゲットしたものだけが、初めて第3ヴァースを（含むフル・ヴァージョンを）耳にして、ようやく自害の理由を理解するに至り、おまけに **Bastard** を繰り返し聴いてきたリスナーには、あのアルバムにカウンセラーとして登場していた存在が、人物などではなく、タイラー自身の"意識"だったのだと確信させてくれる（それが死んだのだ！）、そんな巧妙な手口を使ったのだ。

これまでは、エースとも名乗っていたタイラー、ザ・クリエイターは、ここに至り、もはや、エースでもタイラーでもない。彼はウルフであり、ゴブリンなのである。



かつて、エミネムは**Encore**の大団円で、観客を巻き添えにして、自害し、オルター・エゴであるスリム・シェイディを抹殺したかのように見せかけ、すぐ、そのあとに、「なんちゃって！というニュアンス」の台詞をつけ加えるのを忘れなかった。**Bastard** から**Goblin**へと転生？？？したタイラーは、このウルフやゴブリンとどう付きあってゆくのだろうか？ 続)

## 8. Sarah / Raquel

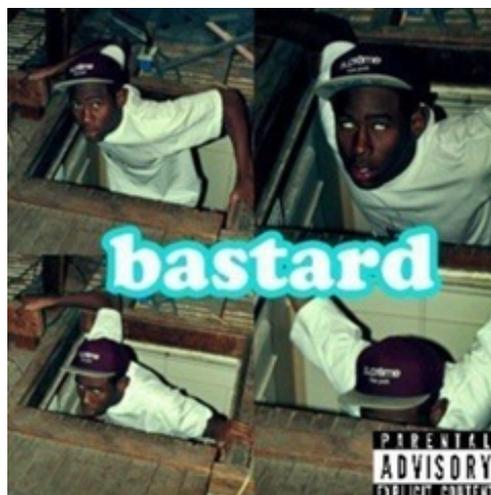
だが、**Goblin**を聴き始める前に、その父親ほどではないにせよ、他にもタイラーが異様に固執している相手がいることも忘れてはならないだろう。  
何度も取り上げてきた"**Bastard**"にはこんなヴァースもある。

**Raquel** treat me like my father like a fuckin' stranger  
She still don't know I made Sarah to strangle her  
Not put her in danger and chop her up in the back of a Wrangler  
All because she said no to homecomin', demons runnin'  
Inside my head tellin' me evil thoughts

I'm the dream catcher but nothin' but nightmares I caught, go to sleep

(ラクウエルは、俺のオヤジと同じで、俺を完全に他人扱い

彼女はまだ気づいてないが、俺が"**Sarah**"を作ったのは、彼女の首を絞めてやるため  
実際には彼女を危険な目に遭わせたり、切り刻んでジープの後ろに置いたりしてないけど  
みんな彼女のせいさ、同窓会の誘いを断ってきた、悪魔が蠢き出した  
俺の頭の中で、邪悪なことを吹き込む  
俺はドリームキャッチャー、でも俺が捕まえるのは悪夢だけ、寝るか)



確かに、タイラーは"**Sarah**"という曲を書いて、**Bastard**の12曲目に入れている。

上のヴァースから察することができるように、本来なら、"**Raquel**"と名づけるべきところを"**Sarah**"(仮名)としておいたのだろう(もともと、タイラーは、自分が有名になることで、ラクウエルは、サラが自分のことだと気づくはずだと、確信しているようにも思えるのだが・・・)

**Bastard**では、この曲の2曲前に入っているVCR/Wheelsの"**Wheels**"の出だしが

"Danielle, Danielle,yeah you heard about **Raquel**

Well that didn't go to well,let us try to make it swell"

となっていて、ラクウエルとつきあいたいという想いが

どこか**バリー・ホワイトの楽曲っぽく低音が響く**なか

(珍しく?比較的)素直にR&Bのスタイルを意識して歌われている(と表現したほうがいいだろう)

)

が、既にお察しの通り、**"Sarah"**では、またもやN.E.R.D.譲りのメロディや

[ビギーからの引用](#)を聴き取れるものの、全く尋常ではない。

曲の頭で聴こえる撃鉄を起こす音から想像できる展開を遥かに超え、

人によっては、吐き気を催すような場面が描かれている。

Verse 2が始まる頃には、誰が聴いても異変が起きていることに気づくはずだが、

Verse 3は、こう始まる。

Half your body laying on my chest

The rest is in my stomach, that's including your breast

(お前の身体の半分は、俺の胸の上

残りは俺の腹の中、そこにはお前の胸も入ってる)

タイラーは、サラの死体を喰べかけたところなのだ。

And I'm a just take another guess

Now you probably wishing that you would have said yes

Am I crazy? Maybe, but fucked up is how I been lately

Shit, I don't give a fuck, your family looking for you, wish them good luck

(で、こうも考えてみた

お前も、イエスって返事しておけばよかったと思ってるんじゃないか

俺がキチガイだって？たぶんな。ここんところ、相当アタマにきてたからな

もう、どうだっていい、家族がお前を探し回るだろう、うまく見つかるといいな)

こんな事になってしまったきっかけはVerse 1にある。

I want to eat you out like jello

And mess with your body like the bass and the cello

And tell your mom I said hello, you want to go to prom? (N\*gga hell no)

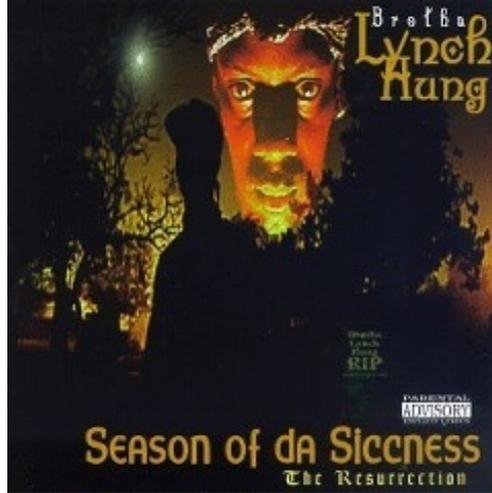
(お前をジェロみたいに食べちゃいたい

ベースやチェロみたいにお前の身体を抱え込んでメチャクチャにしたい

だから、お前のママに挨拶して、ハロー、プロムに行きたいだろ？ってお前に訊いたら (お断りよ

)

(ダブル・ミーニングで) 曲の中で人を喰うラッパーとしては、超ヴェテランのブラザ・リンチ・ハングが有名で、



このところ非常に完成度の高いアルバムを出しているが、  
18歳やそこらで（その年頃だから、とも言えるわけだが）、  
すげなくふられた腹いせに、  
食べたいほど好きだった女の口を  
（殺して）喰べてしまうとは・・・。

さらに続く。

Bitch, you tried to play me like a dummy  
Now you stuck up in my mothafucking basement all bloody  
And I'm fucking your dead body, your coochie all cummy  
（こいつめ、俺をアホ扱いして弄びやがって  
お高くとまっていやがる、俺の地下室で、全身血まみれのくせに  
俺は死体になったお前とファックしてるのさ、お前のアソコですげえ気持ちよくイける）

・・・タイラーは死姦にまで及んでいるのだ・・・。

そして、"Bastard"に戻ってみると、一番最後のヴァースはこうなっている。

My wrist is all red from the cutter  
Drippin' cold blood like the winter, the summer  
Is never that's equivalent to me and **Sarah**  
Well that's not her fuckin name, but I think this shit is clever...  
（俺の手首が真っ赤に染まっているのはカッターのせい  
滴り落ちる血の冷たさはまるで冬、夏は  
二度来ない、俺とサラの仲と同じだ  
まあ、それは彼女の本名じゃないけど、そうしておくのが賢明だと思う・・・）

ここに出てくる”夏”。

サラ、つまり、本名ラクウエルという、  
タイラーに狂気にも似た欲求不満だけを募らせるだけの”憧れの女性”。

この二点を押さえておくと、

**Goblin**のリリース直前に、ライブ・ステージ以外で、

その収録曲から、["Analog"](#)、続いて、["She"](#) の順序で公式にリークされていったのは  
"Yonkers"の時と同様に、何らかの意図があるような気がしてならないのだが・・・（続

## 9. Meet me by the lake

オッド・フューチャーがライブで立ち寄ったロンドン、BBCのスタジオでの、タイラー、ハジー・ビーツ、DJのシドの3人によるパフォーマンス"[Analog](#)"(2011.5.3)を一、二度見た段階では、正直なところ、取りたてて強力な印象が残ったわけではなかった。

キャッチーだけど、妙に執拗なりフレイン  
Watch the sunset, we can watch the sunset  
それと

Could you **meet me by the lake?**

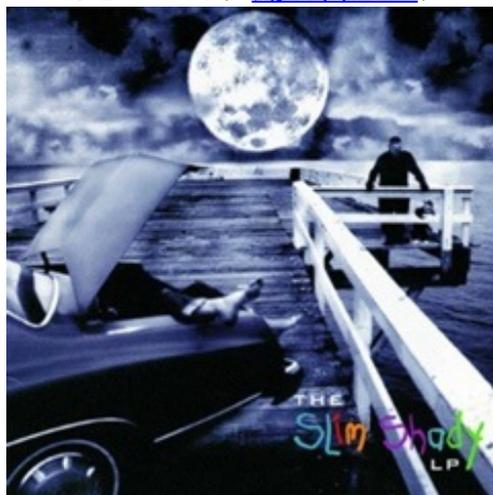
という何度かフレーズくらいで  
あとは、彼女と湖畔に遊びに行くんだな、程度の  
漠然とした、それこそ"アナログ"なデートのイメージくらいしか浮かばなかった。

ただし、既に"[Sarah](#)"を繰り返し聴いてきたようなタイラーのリスナーなら  
それだけでは済まないのでは?と邪推してしまう。

あの曲にも"夏"が出てきていたけれど、  
ここではヴァースの最後が  
Summer never has to end with me  
(俺と一緒に(楽しい?) 夏は終わらない)  
と締め括られている。

そこからは、どうしたって、タイラーと一緒にいることを拒んだ  
あのサラ=本名ラクウェルの末路を思い出さずにいられない。

そこにきて、[湖と言え](#)ば、



がトラウマのようにこびりついている。

そんなリスナーの欲求に半ば応じるかのように、  
"Analog"のライブ・セッション映像が公開された翌日には

早くも"She"と"Fish"がリークされた。

"She"はなんと言っても、フランク・オーシャンが歌うフックがその節回しとあいまって気持ち悪い。

The blinds wide open so he can  
See you in the dark when you're sleepin'  
Naked body, fresh out the shower  
You touch yourself after hours  
Ain't no man allowed in your bedroom  
You're sleeping alone in your bed  
But check your window, he's at your window  
(ブラインドが開いてるから、彼から  
君が暗闇で眠る姿が見える  
裸で、シャワーを浴びたばかりの  
君がオナニーするのが  
君の寝室は(他の)男子禁制  
君はベッドで一人きりで眠っている  
窓辺に注意するんだ、彼がいるぞ)

彼とは、言うまでもなくタイラー。

となると、君とは、サラ=本名ラクウェルに違いない。  
そして、フランクは、彼女が現在交際中の相手という設定だろう。

イントロなしで、いきなり始まるフランクによるverse 1では、  
彼女とベッドにいる彼が  
彼女のストーカー=タイラーに襲われ、反撃し、追い払っている。  
フランクの描写は巧みなので、ミュージック・ビデオも作りやすいだろう。



一方、タイラーの、彼女への執着、粘着ぶりは凄まじい。

”七回断われたら、八発銃弾を撃ち込む”  
とか

"Sarah"を聴いているリスナーなら

十分に想像できるかもしれないが、

”魂の抜け殻となったお前の死体を森に引き摺って行って  
姦淫する、それほどお前を愛している”

ストーカーの心理が、かなり立体的に描き出されているのが、  
この"[She](#)"なのだ。

オナニーする女性を覗き見たことをネタにして  
マスターベーションにいそしむストーカー  
という構図さえ浮かび上がってくるだろう。

そして、何度か聴くうちに

**Meet me by the lake** around 10 and skinny dippin' and then..  
とあることに気づく。

また、湖だ。

もしかしたら、"She"に出てくるストーカー、タイラーの夢想在  
"Analog"なのではないだろうか。

We should take a dip in that lake quick and then split  
Then do something that's beyond what we both can  
とは、

やはり、”全裸で湖に入っていったあと、彼女を切り刻み、  
想像を絶する行為に及ぶ”  
と聴くべきなのか。

ストレートなラヴ・ソングに聴かせようとさせないところも  
タイラーの罠なのかもしれないが・・・（続

## 10. (Frank) Ocean

前述したように"[She](#)"と同時にリークされたのが"[Fish](#)"だった。

"Analog"と"[She](#)"が Meet me by the lake でつながるとすれば、

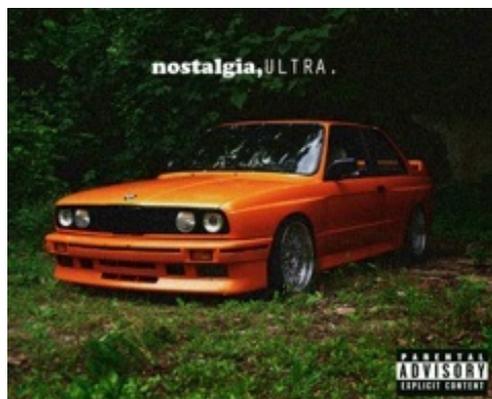
"[She](#)"と"[Fish](#)"は、まず、フランク・オーシャンの客演によってつながる。

聴き取りやすく、耳に入ってきやすいとはいえ"[Fish](#)"のブリッジでの彼の歌も、これまた風変わりだ

。

Now I'd like to take this time of day to thank the Mother Earth  
Letting the sun shine down on the lake while I fish the waters  
Ooh, hide your daughters, hide your sisters, hell hide grandmama too  
Cause the fisherman's raping everybody in the pool, he on the loose, yeah

ここだけでも、"水"を湛えた場所が3ヶ所も出てくるのだが、  
その由来については「夢に出てきただけだ」とうそぶく  
彼のアーティスト名がoceanだ（本名はクリストファー・ブロー）。  
と書くと、



デビュー・アルバム [nostalgia, ULTRA.](#) (2011.2.18) に収録されている  
["Swim Good"](#) を思い出すむきもあるだろう。

I'm about to drive in the ocean  
I'mma try to swim from something bigger than me  
Kick off my shoes and swim good, and swim good  
Take off this suit and swim good, and swim good, good

と繰り返され、ocean と swim の相性のよさを確認できる。

が、それはとんでもない意味での相性の良さなのだ。

フランク・オーシャンは、あまりに大きすぎる失恋の痛手から、

海までクルマを走らせ、まさに入水自殺を図ろうとしている・・・

これはそんな曲なのだ。

彼はオーシャンをどこまで泳いでゆこうというのだろうか・・・。

さらに、"水"つながりと言えば、

このアルバムには"[There Will Be Tears](#)"という曲が入っている。

これは、[ミスター・ハドソンによる同名曲](#)の歌い出しの部分を丸ごとサンプリングして、そのパートの歌詞

There will be tears I've no doubt

There may be smiles but a few

And when the tears have run out

We'll be numb and blue, blue

I can't be there with you but I can dream

I can't be there with you but I can dream

(今にも涙がこぼれそう、自分でもよくわかる

作り笑いの一つや二つはできるだろう

でも、涙が涸れ果てる頃には

お互いに何も感じられなくなって、顔は真っ青だろう

あなたとは離れ離れになるけど、夢の中なら一緒にいられる

あなたとは離れ離れになるけど、夢の中なら一緒にいられる)

に導かれるように、そこから先、オーシャンは、自らの体験を歌い継いでゆく。

言葉はほんの少しだが、

そこでは祖父の死、彼にとっては父親替わりだった祖父との別れ

が取り上げられている。

彼もまたタイラーと同じように父親を知らずに育ってきたのだった。

「タイラーと知りあってからは、新しい音楽については彼がずいぶん示唆してくれたし、いろいろ聴いた。

ただ、自分の曲作りのプロセスに限って言えば、本質的に以前のままだ」

オーシャンはこう[インタビュー](#)で話している。(続

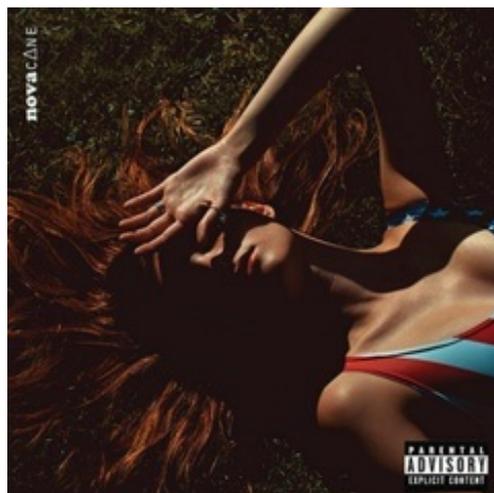
4. STREETFIGHTER 5. STRAWBERRY SMILING 6. SUPERHERO 7. HE ALL TRY 8. METAL BEAR  
9. LILLO 10. LONES & WOMEN 11. LOVECRIMES 12. COLLECTIVE 13. THERE WILL BE TEARS  
14. EVER GOOD 15. DUST 16. AMERICAN WEDDING 17. SOUL CALIBUR 18. NATURE FEELS.



FRÖNK  
OCCÓN  
©2011

## 11. Novacane

そして、フランク・オーシャンと言えば、"[Novacane](#)"だ。



やっぱ、そうだったんだ。これだっこのを手にいれてから、  
しても、しなくても、すっかり不感症。人間を超越したな  
もうヴァイアグラ使ってやっても同じ、どのシングル曲もオートチューン使い  
感情ゼロ、押し殺された感情、補正されたピッチ（=気分）、計量化された感情  
こうなったのも、あのモデルのコのせい、ハリウッド流儀の空虚な笑顔  
ストリッパー級のお尻とおっぱいには、絶句、お口使いもレベル高し

彼女と会ったのはコーチェラ、俺はジガを、彼女はZトリップを観に行った、好対照でバッチリ  
俺がひんやりした芝に腰を下ろすと、彼女が手渡してくれたのが、青いボンゴ、イイね  
彼女が言った、何がなんでも歯医者さんになりたいの、今は学生だけど  
授業料払うため（サン・ファーマディナンド）ヴァレーでポルノに出てるの。きみはとにかく働いてる  
ってわけだ

いやあ、もう俺、自分の顔の感覚も麻痺してるよ、俺たち、何を吸ってんだろ  
彼女が言った、せっかくハイなんだから、わたしをちょっとだけ味わって見ない

ノヴァケイン、ノヴァケイン、きみが欲しい

俺を気持ちよくして、長く続けて、麻痺するまで、してくれ  
今だけわたしを愛して、わたしがいなくなっても、わたしだけ愛して  
わたしだけ愛して、わたしだけ愛して、麻痺、麻痺、麻痺してるよ

シンクからあふれ出そうな食器、キッチンでそわそわしてる、朝飯からコカイン、おっと、危ない！  
ベッドに群がる女たち、三脚にカメラを設置、小さな赤い撮影開始ボタンが点灯  
気分はまるでスタンリー・キューブリック、[広がる幻影](#)

その快感を『アイズ・ワイド・シャット』状態でフィルムに収めようとしても、逃げられてしまう  
こうなったのも、あのモデルのコのせい、ハリウッド流儀の空虚な笑顔

ストリッパー級のお尻とおっぱいは息を飲むほど、絶対きみを忘れられない  
きみのせいで俺、今まで、ただの一度も、全く知らなかったこんな感覚に溺れてる  
あれ以来、必死で思い出したり、記憶のかけらを集めたり、組み立てたりしている

今や俺はキャンパス内で、化学者気取り

でも、あの薬物だけは検出されてない、きみから見つかった成分だけは  
もう俺、自分の顔の感覚も麻痺してるよ、俺は何を吸ってんだろう

彼女が言った、せっかくハイなんだから、わたしを味わって見ない、ほんのちょっとでいいから

ノヴァケインで痛みを鎮めて

かわいい女の子たちが寄ってくる

たっぷりと俺を愛してくれる、存分に、でも、空しい、哀しい

かわいい女の子ばかり寄ってくる

たっぷりと俺を愛してくれる、存分に、でも、空しい、哀しい

俺はすっかり麻痺してる

彼女のあの感触が思いだせない

ノヴァケインで痛みを鎮めて

この曲では、ドラッグを使ってセックスをするから気持ちいいのか、  
セックスが気持ち良すぎて、ドラッグを使っているみたいなのか、  
はたまた、ドラッグを使って、気持ちよかったセックスを思いだそうとしているのか  
それはドラッグを使ってもしよせん思いだすことはできないのか

そのあたりのあいまいな部分を、

[恩師トリッキー・スチュアート](#)が手がけたアンチ・クライマックスな堂々めぐりなトラックにのって  
フランクはうまくとらえている。

いずれにしても、彼の記憶に強烈なセックス体験を刻みつケタむきぎみつたのは、

学費を稼ぐためポルノに出ている歯科医を目指す女子学生。

歯科医志望ということで、治療で使う麻酔薬ノヴォケインなのか

とひらめくものの、タイトルの綴りを見ると、Novocaineではなく

Novacaneだ。

フランクによれば、

(マリファナで気分を盛り上げた勢いのまま突入した) この子とのセックス (の記憶?) が強烈過  
ぎて、

他のどの子とセックスしても、例えば、たとえヴァイアグラを使おうが、全然気持ちよくない。

それは、あの口に、ノヴォケインが使われた時みたいに、感覚を麻痺させられてしまったからだ、と  
いうことなのだろう。

ただし、Novocaineではなく

[Novacaneと歌っている](#)。

彼が上手いのは、ノヴォケインが、感覚を麻痺させることで、痛みを感じさせなくなるのを踏まえた  
上で、

ノヴァケインが欲しい、と歌っているのだ。

彼の感覚を麻痺させてしまった、欲望の対象としての彼女が生成したのは、  
新しい（＝ノヴォ）ノヴォケイン（あるいは新種のコカイン？）＝ノヴァケインであり、  
それは、そんな彼女に焦がれる胸の痛みを鎮める、  
新しい（＝ノヴォ）ノヴォケイン＝ノヴァケインだということのだろう

そんなわけで、この曲で、フランク・オーシャンは、  
まったく新しい薬物を世の中に広めてしまったわけだが、  
だからといって、リスナーに、既存のドラッグの使用を薦めているわけではないのは  
ノヴァケインが彼の脳内で自然に（勝手に）生み出されたものであることからわかる  
だいたい彼は、ここで、ヴァイアグラとオートチューンに、  
自然な感情表現や生理を阻害する共通点を見出し、  
否定的なものとしてとらえている。

つまり、彼はリスナーにドラッグの使用を薦めているのではなく、  
あくまでも、自分が曲を書く上でテーマそのものとして、ドラッグの使用、を自らに課すことで、  
陳腐と思われがちな、このテーマでも、まだまだ面白くて新しい（＝ノヴァ）曲が書けることを、  
フランクは自分と同じシンガーソングライターにアピールしているのではないのだろうか。

もはや、重要なのは、ドラッグの使用そのものではなく、  
ドラッグの使用をいかに利用するのか、ということなのだろう・・・（続



まずは、[これ](#)と[これ](#)とを聞き比べてほしい。

最初のほうは、2009年12月25日にリリースされた**Bastard**に収録されていたバージョン、そして、もう一方は、その一年後に発表された**Bastard**一周年記念盤収録バージョンだ。

ブランダン・デシェイのヴァースが全て取り除かれ、  
マイク・Gが新たに吹き込んだヴァースに差し替えられている。

当然、そこには理由があるはずだ。

ブランダン・デシェイは、ドム・ケネディの["Locals Only"](#)や  
ケイシー・ヴェギーズの["Ridin' Round Town"](#)を手がけたことで、  
2009年よりも2010年のほうが、間違いなく知名度をあげている、  
少なくともプロデューサーとしては。それに、

そのケイシーと共に、一般にオッド・フューチャー周辺人脈の中に位置づけられているし、  
ブランダン、ケイシー、タイラーの三人による["Rest Stop Flow"](#)もある。

しかし、タイラーによる（あくまでも！）一方的な話をまとめるとこうなる。

彼がマイスペースで曲を発表していた16歳の頃から

ブランダンのほうから一緒に演りたい、と一方的に急接近してきたのだという。

彼があまりにひっきりなしにそう言うのと、ラッパーとしてはなかなかいいと思ったことから、彼にビートを送ってあげるなどしたという。その成果が["BFF"](#)あるいは



[Volume: One! For The Money](#) (Mixtape, 2008.9.8)



[Volume: Two! For The Show](#) (Mixtape, 2009.4.10)

を通じて発表されてゆくことになる。

前者で、タイラーは、後に **Goblin** で聴かれるそれに近い！ビートの ["Odd Future Freestyle"](#) や ["Orange Gum Drops"](#) をプロデュース。後者では ["More Ovaltine Please"](#) やタイラーのジェームス・パンツへの憧憬をそのままビートにしたような ["Whats So Fxckin Funny"](#) を提供。

タイラーによれば、ブランダン、どうしたらオッド・フューチャーに入れるのかしきりに訊いてきたというが、上の **Volume: One! For The Money** に入っている ["Odd Octubree"](#) を聴くと、それが彼の切実な思いだったことが痛いほどよくわかる。

これは、MF ドゥームの ["One Beer"](#) のビートを使い、

タイラーがかつてエイス・クリエイター名義で出していた ["Odd Toddlers"](#) のトラックを勝手に延ばして、そこにブランダンが自分のヴァースをのせたものだ。そこまでして、オッド・フューチャーと一体化することを夢見ていたのだろうか。

だが、そんな一方的な想いとは裏腹に、タイラーはオッド・フューチャーに全く彼を必要としていなかった。これ以上、彼とつきあうこともないと思ったのだろう。にもかかわらず、ブランダンは、次のミックステープ **Volume: Three! To Get Ready** のアートワークをタイラーに頼もうとしたという。

それから数ヵ月後経った2009年12月25日、

タイラーが**Bastard**をインターネット上で公開しようと2時間前に  
ブランダンが、この同じ日にミックステープを出すという情報を入手。  
その当時、双方のリスナーの層がダブっているから食いあいになること、そして、  
**Bastard**のリリース日をブランダンに前々から伝えてことから考えて  
彼が自分のリリース日にわざとぶつけて出すのだとタイラーは判断、  
何も知らなかったとシラを切ったブランダンも結局、タイラーに謝罪したという。

実際、問題のミックステープ **Your Favorite! Mixtape** は  
25日の昼までの半日で作り上げ、ブランダン自身のラッパーとしての  
側面をアピールする目的で出したと公式にコメントが出されている。  
その目的は理解できる。が、なにも25日に慌ててやることではなかったのでは？  
という思いは禁じえない。



つまり、その日からちょうど一年後に出した**Bastard**一周年記念盤で、

"Session"のブランダンのヴァースをオッド・フューチャーのマイク・Gのそれに差し替えたのは、  
タイラーからの、まる一年越しのブランダンへの返答だったのだろう。

その一年の間に、ブランダンは少なくともプロデューサーとしては着実に成長し、いい仕事を残し  
てる。

と同時に（タイラーによれば）、"Earl"のビデオ撮りの日に、

フェイスブックにタイラーをディスるコメントを書き込んだと思えば、削除した一件もあったという

。

彼が最初にL Aに来た時、

オッド・フューチャー・スタジオをビデオ撮りに使ってもらったり、出演するギャルを紹介したり

、

食事も用意したのに、いったいなんなんだ・・・？というのがタイラーの本心なのだろう。

タイラーが大げさに話していることも否定できないが、

ちなみに、この件に関しては、ブランダンから一切コメントは出ていない。